

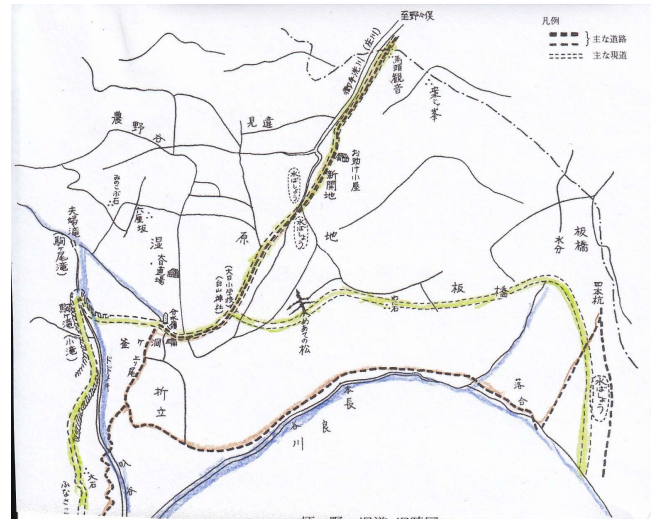
高鷲町内集落地誌（4）

「高鷲村史続編」より編集して再掲載した。

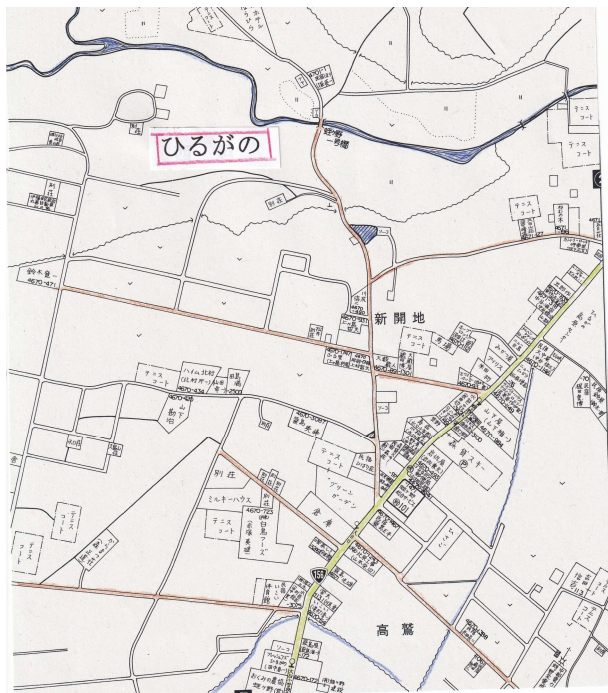
蛭ヶ野（ひるがの）

蛭ヶ野という地名は、鮎走由緒書の泰澄大師伝記によると、蛭が多数いたことから名付けられたと言われている。

蛭ヶ野は、昔は高層湿原植物群落としてのたずまいを残していたが、戦後の引揚者による開拓によって変貌した。昭和30年頃より酪農が盛んになり、昭和40年頃には蛭ヶ野スキー場が開場してから国道156号沿線には商店や民宿ができ、夏のリゾート地としてスポーツ合宿が盛んになり観光地化した。平成13年には農産物加工施設としてたかすファームズが開設された。



蛭ヶ野地区旧道・旧蹟地図



平成4年当時の蛭ヶ野地区

また『東海の軽井沢』のキャッチフレーズで別荘地として売り出し、平成・令和の今、高鷲町の中で人口が多い地域となっている。

蛭ヶ野地区は西洞地区に属していたが、平成になり西洞から分かれ地名も『蛭ヶ野』という漢字表記から『ひるがの』のひらがな表記になった。

学校も平成7年に大日小学校、高鷲小学校鷲見分校、西洞分校が統合され、新しく高鷲北小学校として開校した。同時に高鷲北保育園も開園した。

蛭ヶ野には昔『お助け小屋』という県道沿い飛騨との境に茅葺きの掘立小屋があった。荘白川から北濃・白鳥へ徒歩で辿る旅人にとって安らぎの施設として一里塚的目安となっていた。

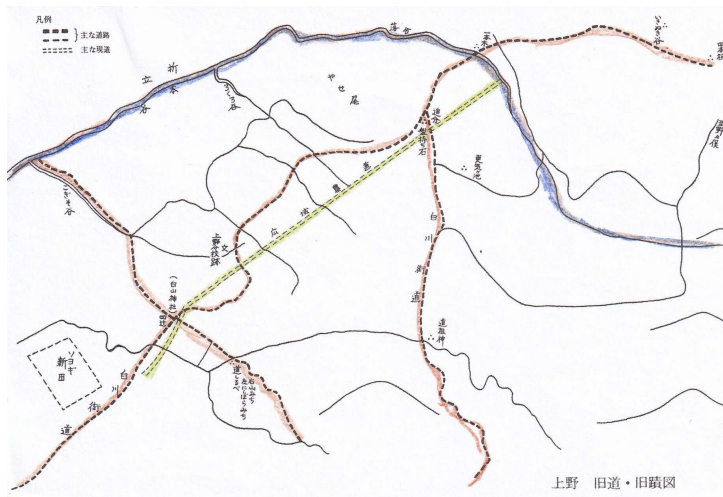


現在のひるがの地区(令和7・6・17撮影)

なお、美濃国と飛騨国の国境紛争の地に『四本杭』と呼ばれる碑が、蛭ヶ野板橋の北端にある。

上野（うわの）

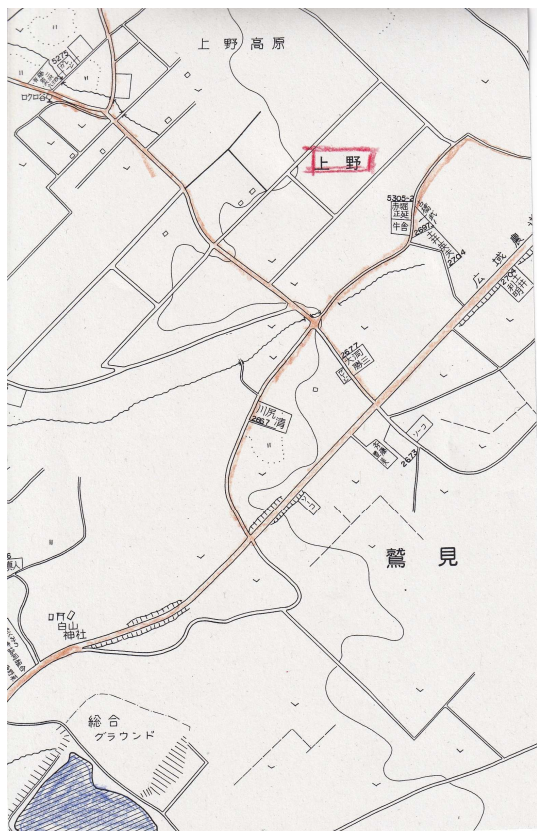
上野は『鷲見大鑑』に記されているように昔は上野を鷲見ヶ上野(スミガウリ)と呼んでいた。武蔵権守頼保の鷲退治にまつわり鷲見村(スミ)の上に広がる野、即ち鷲見ヶ上野(スミガウリ)と云うようになった。また鷲見村の住人はおらが在の上にあるのであるところから上野(ウリ)と呼んだ。



上野地区旧道・旧蹟地図

上野地区は高冷地農業を基盤とした新開拓地区に思われるが、歴史的にも既に中世から各種の資料にみられる。例えば、宝暦 5 年の豪雪の日に石徹白騒動にまつわる追放、神職の家族が上野において悲劇を繰り広げた(濃北義民録伝)。また江戸時代の上野は、西洞村・鷲見村の総山として、向鷲見・穴洞・中切・正ヶ洞・鮎走の各村の入会地として、焼畑をはじめ屋根の葺草、家畜の飼料やふみ草、薪炭の採取地として重要な役割を果たしていた。そのため山地境界の紛争も多発していた。現在は高冷地野菜の主産地として「ひるがの高原大根」の名で重要な産地となっている。地区の東部は、昭和 52 年に『郡上高原カントリークラブ』、平成 8 年には農業公園『牧歌の里』が開場し奥美濃の自然条件を活用している。

また、平成 6 年には広域農道『やまびこロード』が完成し、平成 12 年には上野体育館、同年に東海



平成 4 年当時の上野地区

北陸自動車道「ひるがの高原サービスエリア」として上野高原上にオープンした。



現在の上野広域農道付近（令和 7・6・17 撮影）